

地域学教育の当面の成果

—2010年度「地域学総説」受講生の最終レポートから—

仲野 誠*

Achievement of Education on Regional Sciences:
A Review of the Students' Final Papers on Theory of Regional Sciences in 2010

Makoto NAKANO

キーワード：地域学，地域学総説，地域学教育，学問と実践，学生の最終レポート

Key Words：Regional Sciences, Theory of Regional Sciences, education on Regional Sciences, academism
and its practicability, students' final papers

はじめに

本稿では、2010年度の鳥取大学地域学部3年生の必修科目「地域学総説」の授業を通して、本学部における地域学教育の当面の成果について考えてみたい。誰かによって発信されることは他者に受け止められ、いかようにか解釈されることによって意味をなす。この講義によって教員や講師が学生に伝えようとしたことは、いったい何がどのように学生たちによって受け止められたのだろうか。そして教員は学生の反応（レポート）に対してどのような責任あるレスポンスを返すことができるのだろうか。

ここで考察のために用いる資料は2010年度の「地域学総説」の学生の最終レポートである。多くの学生たちは本学への入学時からの自分の変容を振り返りながらこのレポートを書いている。よって、このレポートをレビューすることは本年度の「地域学総説」の成果のみならず、彼／彼女らが入学してから受けてきた地域学教育を振り返ることを意味するだろう。もちろんそれは学内における教育だけではなく、学外での様々な経験をも絡めた教育成果である。

この「地域学総説」の構成と内容は、本号所収の柳原邦光論文「地域学の挑戦5」に詳しいが、概ね次のとおりであった。この授業全体の構成は第1部「地域をとらえる視点」、第2部「地域から発するさまざまな取り組み」、第3部「全体取りまとめ+ディスカッション」であった。第1部では、本学部の教員が「地域」をとらえる視点や思考の枠組みを紹介・議論した。第2部ではゲスト講師を中心にして具体的な地域における実践の事例が紹介された。第3部では、まず第2部をとりまとめるための全体ディスカッションを1回、その次にこの授業全体を取りまとめるための全体ディスカッションを1回実施し、合計2回の全体ディスカッションを試みた。

この授業では合計2回のアンケートと2回のレポートを課している。まずアンケートは、第3部において2回実施され、それぞれが自分の学びを振り返るきっかけとなったり、第3部で2回実施

* 鳥取大学地域学部地域政策学科

された全体ディスカッションの資料として活用された¹。また、重要な着眼点や論点を挙げているレポートやアンケートの回答は適宜匿名で受講生全員に還元され、そのつど大変貴重な知的刺激を共有してきた。レポートは、第1部終了後と、第3部終了後の2回課された²。本稿で考察の対象としている最終レポートは、この授業におけるこれら複数のレポートやアンケートの蓄積の上に書かれたものである。

これらのレポートやアンケートからは、講義が進むにつれて学生たちの理解が深まっていくことがよく読み取れた。地域学教育の成果を考察するためには、回を重ねるごとのレポートの変容のプロセスを分析するのも意味のあることだろうが、ここではひとまず学生の最終レポートのみを分析の資料として「地域学総説」および本学部における地域学教育の当面の成果について考察してみたい。

本稿の目的は地域学の定義を明らかにしたり、地域学の実践性や方法論を緻密化することではない。あくまでも「地域学総説」の受講生がこの授業をどのように捉えたのかということとその成果を考察することがその目的である。そして本稿を地域学をこれから鍛えていくための資料とした。本稿における見解は本学部の「公式見解」ではなく、あくまでも筆者のものである。

1 本稿の位置づけ

この地域学部は4学科で構成されているが、いずれの学科にも共通し学部全体を貫く学問の訓練段階として、次のような授業が設定されている。1年次前期では「地域学入門」、2年次通年で「地域調査実習」、3年次前期でこの「地域学総説」、最終学年で通年の「卒業研究」という具合である。つまり、このように仕組まれた訓練の段階を念頭に置くと、3年生前期「地域学総説」は入学以来2年間の自分自身の「地域(学)」との向き合い方を問い直す時間として位置づけられている。それは、同時に大学生生活後半における自己の訓練のあり方をよりリアルにイメージしなおることだろう。そしておそらくより重要なのは、卒業後にこそ継続していく「地域学」の自らの実践に向けてスタートしなおす時間でもあったのではないだろうか。このような、4年間のカリキュラムにおけるこの授業の位置づけを確認したうえで、最終レポートから浮かび上がるいくつかの論点を列挙しながら、今年度の「地域学総説」のひとまずの成果について考えてみたい。

本稿では本学部の全4学科(地域政策学科, 地域教育学科, 地域文化学科, 地域環境学科)の受

¹ 第1回目のアンケートは第2部終了後すぐに課された。その質問は次のとおりであった。「第2部の講義を聴いて、何が重要だと思ったか、何を学びとることができたと思うか、自由に記しなさい」。この回答として大変優れたものが多く、「地域学総説」全体コーディネータの家中茂(地域政策学科教員)が主だった回答をA4版4ページにまとめ、学生に還元して第2部の取りまとめのディスカッションの資料として活用した。2回目のアンケートは、この第2部のとりまとめディスカッション後に課され、最終回の全体ディスカッションの資料として活用された。2回目のアンケートの質問は次の2つであった。「①次回の総合討論でとりあげてほしいこと(テーマ, 講義への質問, 地域学の課題etc.), ②講義の進め方や感想」である。この回答にも非常に優れた着眼点や気づきを記したものが多く、それらを筆者がA4版8ページに集約して最終回での議論で全員に配布し、ディスカッションのための資料とした。

² 第1回目のレポート課題は次のとおりであった。「地域のとらえ方について、これまでの講義(第1部)をつうじて、新たに気づいた点について述べなさい」。第2回目のレポート課題については後述する。

講生約220名分のレポートを考察の対象とした。レポートは総じて大変読みごたえのある作品が多かった。その理由としてさまざまなことが挙げられるだろうが、多くのレポートに共通する特徴として自分を「棚上げ」せずに、迷いながらも粘り強く考察を試みている点が挙げられる。それはどうということかという、あくまでも自分自身の経験と絡めながら講義に向きあい、講師の提起する課題を自分の課題としてとらえようという態度が多くのレポートから読み取れるということだ。

ここでは、すべての最終レポートを精読した上で、筆者が重要な論点だととらえた学生の記述を引用する形式で議論を進めていく。筆者の理解では、地域学とは既に完成されたものではなく、「地域学総説」とは「地域学／地域づくりの〈専門家〉である教員やゲスト講師が、〈素人〉の学生に教える」というような一方的な関係性にもとづくものではない。むしろ、「地域学」は地域に生きる当事者や学生の力を借りながら、鍛え上げられ続けていくものとしてとらえている³。

このような理由から、ここで取り上げる学生の記述はこれから地域学を練り上げていく上で優れていると筆者が判断するものに限られてしまう。それは、地域学は地域の当事者である学生の力も借りながら多様な地域の当事者とともに鍛えていかねばならない、という学問的立場からの議論に立脚するからだ。もちろんこの立場に対しては「学生のレポートへの批判的な言及が全くない」とか「数量的な分析がなされていないから／全員のレポートに言及していないから、レポート全体の水準や傾向がわからない」というような批判が想定される。それらはすべて妥当な批判であろう。そのような批判を甘受しながら、あくまでも「地域学を鍛えるために学生の力を借りる」という本稿の立場に立って議論を進めていきたい⁴。

最終レポートの課題は次のとおりであった。

第1部、第2部の講義をふまえて、

- ①自分の受け止めた「地域学」について説明しなさい（説明する相手として、たとえば家族や友人、就職活動の面接官などを想定するとよい）。
- ②そして、それを自分のものとして深めていくにはどうしたらよいか論じなさい。

つまり、まず「自分にとっての地域学」について論じさせ、そしてそれを受けて「自分なりの地域学の実践」について考える、という2部構成である。

³ 本学部へ入学した時から、学生は「卒業までに〈あなたにとっての地域学〉を説明できるようになりなさい」と問われ続ける。これは、地域学では標準化された解答があるわけではなく、一人ひとりが自分自身の問いに向き合い、地域に生きる当事者としてその都度の解答を出さねばならないからだ、と筆者は理解している。

⁴ 本稿におけるこの立ち位置は、環境社会学の鳥越皓之の議論に拠っている。「学問の実践」に関する議論において、鳥越は自らの立場を次のように主張している。「自分としては、現場に住む地元の人たちという『他者の力』を自分の力と合体（synergy）させることで、自分の研究を進めてきたので、合体という作業が結果的に実践的になるという考え方をしている。／この考え方にもとづいて、『生活環境主義』というモデルをつくってみたいしたが、このモデルの欠点としてしばしば指摘されることは、地元の人たちに対する批判がないという点である。それは当然そうで、地元の力を借りるという学問的立場だから、地元から学ぶということはあっても、批判ということは少ない。したがって、これは欠点であるという指摘が当を得ていることは認めるが、これがまた固有の研究を生み出せる長所ともなっているの、おいそれと捨てるわけにはいかない」（鳥越 2006:278）。

次に受講生のレポートを適宜引用しつつ、この授業が伝えたことについて考えていきたい。すべてのレポートを読んで、筆者は学生の議論は次の4つの論点に集約できるのではないかと考えた。それは「地域学のわかりづらさ」、「地域学の特徴」、「地域学の実践・方法」、「自分にできること」の4つである。それらの論点を挙げながら、順に議論を展開していく。なお、本稿での学生のレポートからの引用はすべてレポートに記述されたまま掲載している。

2 地域学のわかりづらさ

この最終レポートを書く際に、多くの学生がまずしたことは、これまでの自分自身の大学2年間の振り返りである。それは「地域学とは何か」という他者の問いかけにうまく答えられなかった苦い経験の回想でもある。たとえば、次のような記述が散見される。

実際に家族や友人に「地域学って何？」と聞かれることがあっても、……答えてもあまり伝わっていない、要領を得ていないようであり、自分でもどこか宣伝文句のようなことばになってしまっているというのが正直な感想でした。その度に間違っていないけれど何か足りない、と感じることがありました。(地域政策学科)

私は、周囲の人から「地域学」とは何か、そこでは何を学んでいるのかということ聞かれると、どのように答えてよいかかわからず、答えに戸惑ってしまうことがしばしばあり、「地域学」について考えることすら辛くなってしまふことがあった。(地域文化学科)

他人に(地域学を)いざ教えるという時には何から話したらよいかかわからないということが多かった。説明不足で結局は分かってもらえなかった。(地域文化学科)

近所の人やアルバイト先の人に「地域学って何をするの？」と、よく聞かれます。その度に私は「人によって、いろいろなことをします」としか答えられませんでした。(地域文化学科)

「地域学」という、これまであまり聞いたことのない学問領域に実際に身をおき、自分でもよくわからないことを他者に説明することの困難は、おそらくこの学部の多くの学生が経験することであろう。この経験は、単なる「説明のしづらさ」という問題にとどまらず、学生自身の存在的不安やアイデンティティの不安定さにも関わる問題となってくる。それは具体的には友人や家族など身近な人たちへの説明の困難や、あるいは就職の面接の場における不安(の予感)として実感されていることのように思われる。「宣伝文句」のようなことしか言えなかったり、「人によって、いろいろなことをします」としか答えられないのは、現実的にはたいへん辛い経験だろう。ここには、地域学の役割と自分自身の課題との乖離がうかがえる。

また興味深いことは、上記のように「地域学」の説明のしづらさ／伝わらなさを多くの学生が経験している一方で、「地域学」の「わかりやすさ」も同時にもっているらしいということである。それは、ある意味平板な「地域学」のイメージであり、たいへん「わかりやすく」かつ他者に伝えやすいものであろう。これに関しては、たとえば次のような記述がみられる。

わたしの今まで抱いていた地域学は、特定の地域を対象として、その経済や文化、歴史、観光政策などを総合的に追求し、地域を研究する学問という淡白なものだというイメージをもっていた。(地域政策学科)

「地域学」と聞くと過疎化、高齢化、地域格差などの社会的な問題について考え対策を練る、いわば行政のような学問だと思っていました。(地域文化学科)

(地域学は)「単なる地域振興・地域づくりに関する学問ではない」……一般的には外部の人々が地域学に抱く印象として「まちづくり」という言葉があるが、これは「地域は行政がつくるもの」というイメージが強いことの現われではないか、と私は考える。(地域文化学科)

「地域学」とは地域を活性化させるためだけの学問なのかなと思っていた……。 (地域環境学科)

今までは地域学というものを慈善事業的なものと考えていた……。 (地域環境学科)

ここにみられる「淡白なもの」としての地域学や「行政のような」あるいは「単なる地域振興・地域づくり」、「地域を活性化させるだけ」という表現は、学生たち自身の、そして社会の地域学に対するある種の「期待」が存在することを表現している。これら一連のイメージは、いずれも無機質で、非人間的で、つまらないものとしての学問あるいは仕事を容易に連想させる。「慈善事業」という言葉も、ややもすると地域学は自分のリアリティからは距離があるもの、実感しにくいものであったことを表現しているのかもしれない。言うまでもなく、これらのイメージは「地域活性化」のさまざまな実践や「行政」に対する一方的な偏見に満ちており、浅い認識といえる。地域活性化にしる、行政の仕事にしる、それらは本来非常に人間的（であるべき）だし、わたしたちの暮らしを豊かにするという志向性をもっていることは当然のことだ。

その一方で、これらの表現が、学生にとっての「地域学」あるいは「地域活性化」の社会的リアリティを物語っていることも事実だろう。つまり、「地域活性化」や「行政の仕事」というものが実際にどのようなものであるか（あるべきか）ということとは全く別次元で、彼／彼女らは、地域における仕事というものはこのような「平板な」ものであると、一種のあきらめにも似た理解をしている／理解したつもりになっているようにも読める。

そして、次の記述からは、学生が「地域活性化」をこのように理解しているということにとどまらず、このように理解することを周囲から期待されているということが伺える。

初対面の人に、「地域学部です」と言ったら、「地域活性化みたいなことをやっているんだよね」と言われた事がある。その人の言う地域活性化というのは、経済的な面だけでのものを指していたので、私は、それだけじゃないんだけど……と感じたが、その時は他にうまく説明できず、曖昧にしまった。(地域文化学科)

大学生活の前半は、このように「地域学を説明することの困難」に苛まれながら、その一方である意味貧困な「地域学」イメージから抜け出すことがなかなかできずにいる学生たちのジレンマが

読み取れる。その一方で、このようなジレンマが、「地域学総説」によって少しずつ溶解し、新たな視点を獲得しつつあることが読み取れる表現も多い。

もっと自分と密接に絡んでくる学問ではないかと思うようになっている。……地域学とは「自分が現在生きている現実と結びついている」学問であるということだ。(地域政策学科)

いろいろな人の話を聞くことによって、自分の限られていた思考の幅が広がるという経験は、自分の新たな可能性や生きる楽しみを知るような気がして、とても楽しいものであった。(地域政策学科)

最初は曖昧すぎてわからなかった地域学が、実際に地域に出て活動する中で、またこの地域学総説の講義を通して、だんだんと私たちにとってなくてはならない、身近な存在としてみることができるようになってきた。身近な存在というのは、単純でわかりやすい存在のように思えるが、そうではない。とても奥が深く、幅広いものであるということをおぼろげに忘れてはならないと私は思う。(地域教育学科)

地域学の中のほんの一部、小さな領域しか見えていなかったということが今になってわかります。(地域文化学科)

地域学入門時のレポートを読み返してみた。当時の私は、「地域学とは地域の抱える諸問題を解決することが最優先として、解決策を導くことのできる人材を育成する学問」だとしていた。何か違うな、と感じた。地域の抱える諸問題を解決するのは地域を活性化させるためには必要不可欠なのだが、私の考える地域学とは問題解決を目的とするのではなく、地域を良くするためにを目的とする学びのあり方なのである。(地域文化学科)

「地域学総説」を通じて、鳥取大学に入学したばかりの頃の私よりは確実に、「地域学」を理解し、近づくことができた満足している私がいるのは確かである。二年前の私では、こんなに「地域学」が身近に存在していることにも気がつかなかった。(地域文化学科)

初めは地域学って何なのか全然わからないというところから始まり、今はなんとなく地域学について自分の中で整理できていたという段階にきている。(地域文化学科)

この類の記述は多く、ひとつひとつ挙げていけばきりが無い。これらの記述から地域学を自分なりにとらえられそうなことを自覚している学生が多々いることがわかる。それはもちろん、学生たちが地域学を明確にとらえ切れたということをおぼろげにせずとも意味しない。未だに明確に理解できたとは言いきれないだろうし、学べば学ぶほどわからなくなっていくという感覚をもっていることだろう。しかしながら、少なくとも、多くの学生は地域学と自分自身が密接につながっており、そして(上述のように)それは平板で、自分自身を棚上げして学べるようなものではないと実感し始めているのではないだろうか。それはまだ「なんとなく」わかりはじめているような段階かもしれないが、地域(学)との付き合い方や向き合い方が自分なりに実感しかけているということは重要だろう。

筆者は「地域学総説」での自分の担当回で、「地域学は自分が生きていく拠り所である〈地域〉を自分の手に取り戻す学問」と議論した。ここにみられる学生たちの変容や気付きは、まさに彼／彼女たちが「地域」なるものをリアルな存在として自分たちの手に取り戻すプロセスの中にあることを表しているようだ。

また重要なのは、学生自身のこれらの変容はこれまでの自分自身に対する内省的態度そのものであることだろう。一見地域学に向き合っているように見えて、実は彼／彼女らはこれまでの自分自身に向き合っているともいえる。地域学を学ぶことが、実は自分自身の生き方に向き合っているのだということへの気づきの萌芽である。次の記述はこの点をよりクリアに表現している。

一年生の頃などは、「地域学？なにそれ？意味わからない」といった具合に、何も考えず、ただ進んでいく授業を眺めていた。私にとって「地域学」はその程度のものであった（というよりは、私自身がその程度であった）。（地域教育学科）

言うまでもなく、万人に均質的に理解されたり、どんな状況でも常に有用な学問など存在しない。その中でも地域学は、この時代における自らの生き方とより深く連動する学問かもしれない。すなわち、自分自身の経験や準備状況に応じて、この学問の有用性は異なるように思う。上の記述を書いた学生にとって考察の対象は、もはや地域学そのものではなく自分自身の生きざまになっている。これは「この時代を生きる作法としての地域学」とでも言うべき学問のあり方を予感させたいへん興味深い視点である。

一方、従来の学問のイメージと講義で聞いた地域学のギャップに起因する疑問も提示されている。たとえば次の記述である。

第2部を地域学の実践では正直なところ、地域学の学問性をもつ、「研究」に留まるニュアンスをぬぐい切れず、果たして、これらは本当に学問なんだろうか、活動ではないのかと、地域学での理論と実践を包括する態度にいささか疑問も沸いていた。（地域文化学科）

これは学問のあり方に対して本質的な問いを投げかけている問いではないだろうか。社会現象の因果関係を説明することが社会科学の一義的な役割であると考えられてきた伝統がある。この考え方によれば、「説明のための理論と実践」あるいは「学問と活動」とは本来別次元のこととされるだろう。しかし、地域学はそのような二分法を超え、地域の生活者にとって「役に立つ」学問を志向するものであると筆者は理解している（もちろん、この点は議論が分かれるだろう）。このように考えた場合、上の学生の疑問や戸惑いにどう答えることができるのか、ということは地域学の重要な課題だと思う。このような疑問をもつ学生は少なくないかもしれない。この問いかけをしっかり受け止めながら地域学を鍛え上げていく必要があるだろう。

3 地域学の特徴

学生たちは、上の「第1節」に紹介したような自分自身の揺らぎを経て、自分なりの地域学を見いだそうとしている。ある者は地域学の定義を試み、またある者は地域学の特徴を描き出そうとしている。ここではレポートに表された、学生にとっての地域学を考察したい。

まずは地域学の定義の試みをいくつか紹介しよう。

人と地域の繋がりを発見し、自分がこの地域に対しての繋がりを見出す道筋を示してくれるもの。(地域政策学科)

地域学とは、それぞれの地域の特性を踏まえた上で、さまざまな学問領域や生活の中で生まれる知恵から、「人として幸福に生きていく」ために必要な条件や、その実現のための方法を考える学問である。(地域政策学科)

「地域学」……は「関係を取り戻す学問」だと思った。「関係」と言えば、人と人との関係を連想させるが、それだけではなく自然、科学、経済、時間などの関係も含まれている。「地域」はそれらが複合的に重なり、相互に関わりあって成り立っている。それらとの関係性を取り戻すことが「地域学」の実践につながるのではないかと考えた。(地域政策学科)

地域学は「実践」の学問である。(地域政策学科)

「地域学」とは、私たちの生活における真の苦しみや幸せを明らかにし、真の生きやすさの追求や幸せの広がりを実践する学問であると考えます。ここでわざわざ真という語を付けたのは、「地域学」というものが登場する以前の学問がしてきたことと区別したかったからである。(地域政策学科)

「地域学」とは、私たちの生活に関係する全ての学問の基礎となる学問なのではないか。(地域政策学科)

地域学は簡単に言えば、「自分たちの住む地域の文化や歴史、自然、あるいは生業などを再発見して、その魅力や特色を発掘するもの」と考えています。(地域政策学科)

私にとっての地域学とは、生活する空間である地域で、実践をし、他者と出会い、地域とともに考える、という活動である。(地域政策学科)

私にとっての地域学とは、あくまでも実践の学問である。(地域政策学科)

既存の「高尚な理論」を「生活の役に立つ理論」に変換する、あるいは近づける手段のひとつが地域学であると考えます。(地域政策学科)

「地域学」は私たちが暮らす空間の充実を図るとともに、その「地域」に眠ったままになっている資源を発掘できるよう、人々の感性を磨き、「幸福」を生みだす、実践のための学問であると考えます。(地域文化学科)

「生きている空間に、積極的な関わりを試みて、その背景、問題、これからの研究・考察・

実践する，人間のための学問」である。(地域文化学科)

「地域学」とは……いかに生きやすく，充実して快適に過ごせるかを考え，その手掛かりを与えて手助けしていく実践的な学問のことを言います。(地域文化学科)

地域学は人間が，本来の「人間らしい」姿に戻るための学問である。(地域教育学科)

暮らしの中に根付いた学問であるような気がする。(地域教育学科)

「生活する中で，一人一人が日々体験するリアルさ，そこでの切実さを直視して考え，生活の必要とそこでの切実さに応える学問(=地域学)」(地域教育学科)

私は「地域学」とは，人が知らない地域との出会い，地域が知らない人との出会い，地域を通した人と人との出会い，地域と人を取り巻く出会いの中で，互いに知り合い，互いに平等な幸せを求めることを可能にするための実践的な学問だと受け止めた。(地域教育学科)

「地域学」というのは，趣味とか興味のあることなど自分の生活の中で行っている内容を自分のもっている想像力を生かしてさらに深めていく学問だと感じました。(地域環境学科)

「地域学」というものは個々人がとらえた「地域」というものを言葉であったり，文章であったり，映像であったりと，何らかの手段によって，私自身がとらえた「地域」というものを私以外のだれかに伝えるための学問であると考えています。(地域環境学科)

以上，冗長だが，学生が記した「地域学の定義」をいくつか挙げた。他にも自分なりの定義はたくさん書かれてあったが，ほぼ上に挙げた諸定義と重複するものが多かった。

これらの数々の「定義」には，従来の学問的な観点からはおよそ定義とは言いがたいものも含まれているだろう。また，これらは「定義」というよりはむしろ「地域学の特徴」と呼んだ方が適切かもしれない。

しかし，そもそも地域学は厳密な理論構築を志向したり独自のディシプリンを形成したりするというよりも，あらゆる学問領域の出発点として「地域」に着眼することの意義を明らかにしたり，そうすることによってわたしたちが生きるこの時代の課題を明らかにして，人間が希望をもって未来を構築していくことの基礎になるような学問だとしたら，厳密に地域学を定義すること自体が困難かもしれない。

そうはいうものの，上の諸定義には共通して表現されていることがありそうだ。それは，地域学とは，わたしが(あるいはわたしたちが)近代化の結果として生み出されたこの時代を生きていく術を地域に着眼することによって見出していこうとする姿勢ではないか，ということだ。このような意味で，地域学とはこの時代に向き合うひとつの作法や姿勢であり，あるいはセンスといえるかもしれない。1年次対象の「地域学入門」から学生に対してわたしたち教員は「〈自分にとっての地域学〉とは何かを答えられるようになれ」と言い続けてきた。学生たちは，その問いに対する，現時点での自分なりの答えを出そうとしているように読み取れる。

このような意味では、従来のアカデミックなディシプリンとしての地域学を定義することはそもそも難しいのかもしれない。学生たちもそのような思想的な側面には気付いている。たとえば次の記述からその類の困惑が読み取れる。

総説は、最初はまたあの時と同じようなことを言っていると思っていたのだが、講師陣の口から出てくることばの一つに「ヒト」とか「心」のように科学的ではない言葉が多く含まれて——受講生による授業後の感想でも大部分の生徒が気付いていた点でもあった——おり、こんなに自由すぎる学問で良いのだろうかと初めは感じていたが、それがポイントであると徐々に気付いてきた。どの講師も最終的に「ヒト」や「心」といった分野に話が絡んでくるような印象を受けた。それは受けが良いとかじゃなくて、それがすべての源であるからなのだと感じた。(地域教育学科)

確かに「心」という言葉が無邪気に使っているように聞こえるならば、果たしてこれは学問と呼ぶに値するものなのかどうか疑わしく思えるだろう。しかしこの学生は「すべての源」という言葉で地域学の基礎的な位置づけや作法としての側面を表現しようとしているようだ。

また、地域学を定義することに対しては、次のような記述もあった。

地域学総説を通して私の考えた地域学というものはあまり具体的に定義してほしくないものであると感じた。地域学総説で話をしてくださった講師の人々は、地域学をしようとは思ってはいなかったと思う。しかし、講師の方々が行っているのは間違いなく地域学で、ここから地域学は意識してするものではないものであると感じた。ここで地域学というものを細かく定義してしまうと、自由性というものがなくなってしまうのではないか。地域学というものにおいて自由性というのはとても重要であると考えた。(地域政策学科)

ここで述べられている「自由性」とはいったい何を指すのだろうか。地域学は自らの課題に向き合うためのツール、あるいは作法やセンスだとしたら、当然問いに応じて「いくつもの地域学」があってしかるべきである。その方法論や理論は従来の学問領域のものを援用することも多いだろう。それでも重要なことは、地域学の誕生は時代の要請であるということだ。新しい学問は新しい課題に対峙するために生み出される。その課題群が多岐にわたるものだとしたら、地域学の「自由性」を確保しておくことは大切なことだろう。

その他、「地域学の定義」とはいえないまでも、地域学の特長についての記述も目だって多かった。以下、その特徴を現す主な語句を抽出してみよう。

「総合的な視点で研究対象(地域)をとらえる」、「地域学の研究対象である地域は私たちの『生活の場』」、「自分自身のことをして捉えなおすという作業」、「『地域学』とは、学問の領域において『役に立たない』といわれてきた私たちの生活の領域に焦点を当てている」、「私たちに寄り添った学問」、「関係性を大切に、しあわせな生き方を追究する」、「精神的な豊かさを求める」、「人と人との交流を取り戻す」、「実践の学」、「当事者性が求められる」、「多くの学問が複雑に絡み合う」、「身近な学問」、「人づくりの学問」、「実際に外に出て行う」、「居心地のいい空間を求める学問」、「地域学は座学では終わらない」、「地域学は一生涯の先生のような存在」、「地

域に暮しているおじいちゃんおばあちゃん、おっちゃんおばちゃんたちが先生になる学問、「みんなが幸せに暮らすための助け合い」、「ひとりひとりがそれぞれ見つめる先が違い、そこで新しい生き方を見つけるといふ未来への発展が地域学」、「自分の持つ素直な気持ちから出発していくことから、地域学は生まれていく」、「すべてのことは地域学につながる」。

このように、学生が考える「特徴」を列挙すると、それこそ一見「なんでもあり」の様相を呈する。しかし、そう見えながらも、彼／彼女らがとらえている特長には通底するものがありそうだ。それは、繰り返しになるが、地域学の学際性、「自分の暮らし」から出発すること、地域（に住む人々）から学ぶこと、自分の課題に応えるという使命、人間同士・人間と自然とのつながりを重要視すること、大学内で完結する学問ではないこと、などだ。これも、前述のさまざまな学問の土台としての地域学というとらえ方や、課題に向き合うための作法としての地域学という位置づけと重なるように思える。

次の3つの記述に至っては、「生きることそのもの」や「生き方」自体が地域学である、という非常に大胆な解釈を提示している。

「地域学とはひとつの生き方モデルである」

「地域学は『生きること』そのもの」

「気づけば、何かの架け橋になっているかもしれない。そういう可能性こそが、生き方、つまり『地域学』である」

果たして、「これでは学問として何も言っていないに等しい」と切り捨ててしまうのか、あるいはこのような解釈が生まれるこの時代背景や（学生も含めた）われわれを取り囲む現在の諸課題を考えた場合、このような解釈には重要な意味が含まれているという態度をとるのか——これは地域学（部）の態度そのものが問われる、かなり本質的な問題であるようにも思える。

確かに、地域学を安易に「何でもありの学問」ととらえるような姿勢は問題だろう。レポートの中には「難しいことは抜きにして、自分の立っている場所について考え、行動するということだ」という記述もみられた。地域学を鍛えていこうという意思やこの時代における地域学の現代的意義の認識をもつことなく／もとうとせずに、「地域学は生き方だ」とナイーブに言い切ってしまうのであれば、地域学を立ち上げる必要は確かにないかもしれない。繰り返すが、この時代になぜ地域学が要請されているのか、という課題を出発点として丁寧に考えていくことが大切なのではなからうか。そして、学生たちの多くの受け止め方は、まだうまく表現できていないかもしれないが、この重要な出発点から自分なりにスタートしようとしているように思える。

4 地域学の実践・方法

以上、地域学の学生なりの定義やその特徴について考察した。次にこの節では、地域学の実践性や方法論的なことに触れている学生の記述を挙げ、学生が捉えた地域学の実践について考えてみたい。

まず、「地域学の実践はいかにして可能か」という問い以前に、「地域学そのものが実践である」という捉え方がたいへん多くみられた。これは上の第2節で取り上げた「地域学の定義・特徴」で

も既に述べたことである。たとえば、既に紹介したが、次の記述は端的にそれを表現している。

私にとっての地域学とは、あくまでも実践の学問である。(地域政策学科)

これほど端的に言い切る表現ではなくても、他にも「地域学は実践的な学問である」あるいは「実践のための学問」、「実践への過程を示す学問」というような表現がたいへん多い。この捉え方は、最終レポートのほぼ全体に通底する解釈である。また表現はやや異なるが「幸福の実現」や「課題解決」あるいは「人として幸福に生きていくための学問」など、「実践的なもの」を地域学の内実として理解している学生が多いことが非常に大きな特徴である。

また、その「実践(的なもの)」の目的も、何か具体的な社会的課題を解決するというよりは、次の引用群にみられるように、「人間の幸福」とでも呼ぶべき非常に根源的なことを達成するものだという理解がたいへん多くみられる。

「生きやすさを追求すること」
「人として幸せに生きること」
「生活の充実を実現すること」
「人と人とのつながりを創造すること」
「豊かに暮すためにはどうあるべきかを考えること」
「人間が、本来の『人間らしい』状態に戻るための学問」

これは、「地域学の目的は、『地域』という空間で『生の充実』、『わたし(たち)の幸福』の実現に寄与することである」(柳原 2010)と同様の文脈上にある理解であろう。またその実践の場は自分たちの「生活の場」や「身近なところ」とであるという「発見」も重要なことだろう。たとえば次の記述は自分と地域学の「近さ」の認識を表している。

「地域学」という言葉だけを聞いてもピンとは来ず、自分たちの生活には縁遠いもののように思えるが、本当は私たちの生活の中にある身近な学問であると思う。……自分の住んでいる地域のことをより多くの人に知ってもらったり、地域を良くしていったりするような活動は自分自身の気持ちですぐに始めることができるのだと思った。(地域教育学科)

私が考えた地域学とは、一言で言い表せば「とても身近な存在」である。……地域学の入り口はどこにでも転がっており、誰でも入ることができるもの。だから、すごいことを成し遂げようとか、この地域をよくしたいというような、固い構え方しなくてもいいということである。……自分の持つ素直な気持ちから出発していくことから、地域学は生まれていくのだと思う。(地域教育学科)

本章第1節で述べた「地域学のわかりにくさ」がこのような「近さ」に転換されていくプロセスはたいへん興味深い。これは、言い換えれば地域の課題を自分の課題として捉える姿勢が要求される、あるいはそれが重要である、ということへの気付きでもある。このような「当事者性」について言及する記述も目立った。たとえば次の記述である。

当事者性が求められる学問である……。一般的に学問というのは研究対象に対して徹底的に客観性が求められる。……地域学でも学問である以上は客観性が求められる。しかしながら、地域という存在は厄介なことに決して自分自身と切り離せないのである。……地域と私は相互関係にあるとも言い換えられる。つまり客観性を持ちながら地域の内側に入り込み、地域を構成する要素の一つとして私がいるのである。(地域政策学科)

わたしは地域学を、一方では地域の当事者として、他方ではアカデミックの背景をもった部外者として、人(自分)が生きる地域を見つめるツール・プロセスだと考えている。(地域政策学科)

自らの当事者性から、あるいは当事者性を自覚しながら地域を考えるのは、換言すれば地域学は内省の学であることともつながる。

地域学総説を通して、今ここで私がどのように生きていたのか、そして生きていくのかをきちんと考えなおさなければならぬと実感した。他地域に学ぶことも大事だし、今私の知らないところでどのような新しい動きがあるのかを知ることは非常に有意義なことだ。そしてそれは様々な生き方を知ることでもある。……それを他のこととしてだけでなく、自分自身のこととして捉えなおすという作業にもつながっているのである。(地域政策学科)

「地域学」は学問であるため、私の問いを議論するためには、その問いが地域のなかでどのようなところにあるものなのか、つまり立ち位置を知る必要がある。このように「地域学」とは、地域のなかの私と向き合っている私自身を見る視点を獲得するための学問でもあると考える。(地域政策学科)

実際には私たちはすごく狭い世界で生きていて、何も見えていないだけだったのである。(地域文化学科)

自分自身と地域がどのような関係にあるかを見つめなおすことも必要だ。「わたし」という存在が、どのような地域に生きるのか、自分の中に存在する地域性がどのように自身に身体化されたのかを、地域に生きるものとして、改めて考え直す必要がある。(地域文化学科)

「地域学」を自分のものとする。それは、自分の納得できる生き方をする、ということ以外にないように思われる。そして、そのうえで自覚的に、他者と関係を築けていけるか、「地域」という場に影響を与えることができているか、を内省し続けることで、深まっていくのではないだろうか。(地域教育学科)

幸せに生きていく、ということについて考えるためには、まず自分自身と向き合わなければならぬ。……自分はどのような存在で、どのような環境の中にいて、誰と関わって生きているのか。そして、自分にとっての幸せとは何か、と考える必要があるのだ。生活の中で、ある

いは学問を通して、様々なことを感じ、学び、新たな発見をし、自分の価値観を再構築する。その繰り返しが地域学における内面的な実践だということができるであろう。(地域文化学科)

以上のように、自分自身を見つめるメタな視点の獲得に気付いた学生は多い。もちろん、それだけに偏りすぎると、学問としての危うさが存在することにも自覚的な記述もあることは指摘しておくべきだろう。たとえば次の記述を挙げたい。

時には、「観察対象」と「観察主体」を分離し新しい目で地域を捉え、考えていくことが必要とされます。地域に入り込みすぎて地域を見失ってしまわないために、より客観的に地域を捉えることができると考えます。(地域環境学科)

この指摘は、上の「内省の視点」と対立するものではなく、相互補完的な関係にあるべきだと理解すべきではないだろうか。

以上、地域学の方法論と呼ぶにはあまりにも漠然とした内容であるが、地域学を「実践」するために学生が必要だと感じているポイントをいくつか挙げてみた。一方、学生たちがこの授業のゲスト講師から受け取った実践のポイントに関しても、非常に特徴的なものがある。これらも具体的な方法論というよりはむしろコツとか態度と呼んだほうがふさわしいものである。次にそのような記述をいくつか列挙しよう。

地域に関わっておられる方たちは、みんな活き活きしていると思った。(地域政策学科)

地域学を実践しておられる人たちはみんながみんな、楽しそうに自分の行っていることを話していらっしやっ。(地域政策学科)

講演に来られた方たちは、皆楽しそうでした。(地域文化学科)

そのような方々の活動は、「地域を活性化させなければ」という義務感や、仕事という感覚で行われているわけではないだろう。自分の住む地域や、訪れた地域、あるいはそこにある文化資源や伝統に魅了され、「自分の好きな地域をもっと多くの人に広めたい、共感したい」という気持ちから、様々な活動に取り組んでおられる方がほとんどではないだろうか。(地域文化学科)

講演していただいた皆さんがとても楽しそうにお話しておられるその姿に、本当に地域が好きで、だからこそのように楽しそうに活動をすることができるのだろうと感じました。(地域教育学科)

地域を元気に成功した方々に共通したものを発見することができた。それは、みなさん何をするにしても非常に楽しそうなオーラが体から発散されていたことだ。そこで感じたのが「地域学」を考えるにあたって、楽しむということが本当に大切なことであるということだ。(地域環境学科)

学生は、この授業で「楽しむ能力」や「楽しむという作法・センス」に出会ったともいえる⁵。この類の力はこれまでアカデミックな場では正面から議論される対象ではなかった（と学生はこれまで考えていた）だろう。ところが、このような力こそが実践の原動力なのだ、という気付きはこの授業における大きな収穫のひとつとして指摘してよいのではないだろうか。

そしてゲスト講師が表現する楽しさは、学生にも伝播している。

私自身は地域学を学ぶことは、他の科目に比べ実に楽しいものであった。なぜなら、学びの原点とは、自分の目で見る、自分の心で感じる、自分の頭で自分なりに考える、そして自分のことばで話すことであるからだ。……自分の生活にもつながり、手応えがあり、自分の目や体で実感することのできる地域学は本当に楽しいものである。最初は他の科目同様、講義という座学で地域学を学んでいるように感じたが、一つ一つ学んでいくうちにあらゆるものに対して地域学の視点を通して考えている自分がいて、地域学の積み重ねがこの結果を生み出したように思えばらしさを実感することができた。（地域教育学科）

そして「楽しむ力」を発揮する条件あるいは源として多くの学生が気付いたことは「好きなことをする」ということである。

地域を活性化させようという気持ちで取り組んでいくのではなく、自分の好きな地域、まちをもっと好きになって以降、もっといろいろな人に知ってもらおうという気持ちからの行動であるように思う。（地域環境学科）

自分の好きなことからスタートしたことが、実は地域の方と関わる機会がある。つまり、全てのことは「地域学」に繋がると考える。大事なことは、ここでどれだけ敏感にそれに気付けるかどうかである。（地域教育学科）

このような「自分の好きなことすること」や「自分の好きな地域を他者に伝えること」が「行動力」や「情熱」の源泉であると多くの学生たちは理解したようである。ここに、「地域活性化」を目的にして行動するのではなく、「自分の好きなことを継続していくこと」や「自分たちがこの地域で幸せに暮らすこと」を追求することが結果的に「地域活性化」に繋がる、という論理がみられる。それは「目的と手段」がこれまでは往々にして転倒していたことへの気付きかもしれない。

自分の好きなことや大切なことを、丁寧に楽しみながら継続していくことが、地域学的実践に繋がる、ということを経験から突きつけられたということだろう。それが行動に繋がり、情報

⁵ ゲスト講師が楽しく活動している様子に言及したレポートは多かった。2010年7月21日の第14回「地域学総説」の「第2部とりまとめディスカッション」において、第2部の講義に対する学生のコメントを読んだ筒井一伸（地域政策学科教員）が次のような指摘をした。それは「『講師の方々の行動力や実践力がすごい』という感想は多いが、講師の笑顔や『地域が好き』とか『楽しみながらやっている』という側面に気づいている感想が少ない」という指摘であった。多くの学生は、この指摘から新たな気づきを得たものと思われる。

の発信や共有を生む。そうすることによってより多くの人々がその活動に関わるようになり、個人の願いがみんなの願いに転換していく、というような理解も見られる。

彼らの活動や、何よりも熱い思いに共感し、魅了された人々が、また別の人々へ伝え……という循環が生まれることにより、結果として地域の活性化や地域資源の再生、再利用へと発展するのである。(地域文化学科)

ここでいう「実践」とは何なのか。私の考える、ここでの「実践」とは、「自分の捉えた地域を他者と共有すること」である。……それと同時に、他者へ発信して終わりなのではなく、他者へ発信してからが始まりだということも学んだ。自分の捉えた地域を他者へ発信することによって、初めてそれらを他者と共有することができるのである。また、「自分からの発信」だけではなく、「他者からの発信」を自分が汲み取ってそれに応えることも、「自分の捉えた地域を他者に発信する方法」であると私は考える。……お互いの地域を「共有」することが重要なのであり、その作業によって、自分(たち)の問いを解決する活動を生み出すことが重要なのである。(地域政策学科)

「地域学」の始まりは一人からのときもあるかもしれないが、それが次第に周りを巻き込み一人から数人へ、また段々と周りを巻き込み数十人へ、そして大勢に変わる。……本当に心から楽しむためには、その楽しいという感情を他の人と共有することが必要で、そのとき初めて真の楽しいに変わる気がする。「地域学」はそんな感情を共有する人たちをも生み出しているのだ。「地域学」の最大の特徴は周りを巻き込み、どんどん大きくなっていくことだと思う。「地域学」の根源はそのようなところにもあるような気がする。「地域学」の根源がそのようなところにあったとは自分でもかなり驚いている。(地域環境学科)

『「地域学」の根源』は「周りを巻き込み、どんどん大きくなっていくこと」にある、というこの表現はたいへん興味深い。このような視点も、方法論というよりはむしろ「コツ」とか「態度」あるいは「生きざま」と呼んだほうがふさわしいものかもしれない。上の一連の記述は、一見あまりにも素朴な議論であるようにも思える。

しかし、一方で、これらの論理はまさに社会科学分野の社会関係資本論や社会ネットワーク論が指摘している「信頼」をもとにした人びとのつながりの重要性の指摘と軌を一にしていることに気付くべきであろう。ここでたいへん重要なことは、学生たちは「社会関係資本」という抽象的な概念を教えられて、それを知識として理解しようとしているのではないということだ。そうではなく、彼/彼女らは他者の生きざまから人と人とのつながりやネットワーキングの重要性に気づき、それを自分の経験とも絡めながら自分の言葉で表現しようと格闘していることである。そうすることによって、その気づきは次第に自分のものになっていくことだろう。もちろん、学生たちはこの授業で学んだことを自由に表現できていると自分で思っているわけではなく、講師の様々な語りを聴き、経験や思考を「自分の言葉にする」という大きな課題をも自覚している⁶。

他者に情報を発信するうえで、「自分の言葉にする」ということが一つのポイントだと考える。情報を聴き、理解し受け止めた気になっていても、自分の言葉にできなければ、それは本当に

受け止めたことにならないのだ。……人と人とのつながりの中で、地域をより良くしていくために基本となる「自分の言葉にする」という作業を大切にしていきたいと思う。そうすることで、自分のものとして深めていくことができる。(地域教育学科)

このような葛藤や格闘を自分の中にちゃんと取り込み、それを抱えながら考え続けることが地域学を追究するわたしたちを鍛え上げるだろう。

この文脈上で、もう一点指摘しておきたいことがある。以上のような「人びとのつながり」や「自己と他者との関係」の構築が地域学の実践の基礎だと捉えるならば、その延長線上にさらに深い理解が生まれているように思える。それは「自己と他者」という二分法そのものを超えていこうという姿勢が見られることである。これに関しては、次のような記述がみられる。

自分の苦勞は自分のものだけではない。幸せは皆と共有しようという言葉が広く使われるように、自分の苦勞も皆と共有するという考えを持つ必要がある。そして自らを客観的に捉える視点を獲得し、自分自身の立ち位置を知ることがこれからを考えていく上で重要な点であり、自分と様々な地域との関係性を広げていくことにもつながるのである。(地域政策学科)

地域は「わたし」である、つまり個人が地域である、という風にも言えると思います。今の「わたし」は、別の「わたし」達、つまり他者と触れあうことでできています。……なんだ、「地域」は「わたし」じゃないか、ということに気が付きました。さまざまな個人＝「わたし」＝「地域」が集まって、様々な他者と影響を与えあっている。それらが大きな「地域」を構成しているのではないかと、思いました。(地域文化学科)

これらの記述はやや観念論的な響きがあるが、地域学にとって大切なことを指摘しているように思える。地域学は、わたしたちが地域で幸せに生きていく技法やその希望を創出しようとしている。そのためにこの学問が批判的に乗り越えようとしている対象のひとつが、西欧に発する近代科学の前提とされている「人間の単一性、平等主義的な人間、あるいは独立した個人といった観念」(今村 1992:403)である。長い間自明視されてきたこの理念を「『わたし』は幾人もの他者(そして『地域』さえも)が重層的に折り重なって存在している」という人間像で批判的に捉え返すことは、地域学の基礎をなすような根源的な思想ではないだろうか。地域学は地域のことを「自分自身のこととして捉えなおす」学問とも言えよう。それは新しい地域像に出会うことでもあるだろうし、新たな自分に出会うことでもあるだろう。

いろいろな人の話を聞くことによって、自分の限られていた思考の幅が広がるという経験は、自分の新たな可能性や生きる楽しみを知るような気がして、とても楽しいものであった。(地域政策学科)

⁶ 2010年7月21日の第14回「地域学総説」の「第2部とりまとめディスカッション」において、第2部の講義に対する学生のコメントを読んだ兄島明(地域教育学科教員)が、「地域というのは語られ、聴かれなければ人びとの間に存在しない」とコメントした。それは学生にとっては非常に新鮮な視点であり、これに刺激を得たと思われるレポートが多くみられた。

地域の可能性は自分の可能性でもある、わたしの苦勞は地域の苦勞でもある——このような視点をも提供したのが「地域学総説」だったのではないだろうか。自分の地域像（あるいは世界像）を広げること、そして他者の可能性を学ぶことによって自分の可能性をも拡大していくという経験が、多少なりともこの授業を通してみられたように思う。

5 自分にできること

この授業から得たヒントや新たな知をもとに、学生たちは自分にできることを考え、レポートに表現した。それはレポート課題の2つ目である、「(地域学を) 自分のものとして深めていくにはどうしたらよいか」という課題への回答である。

これも興味深い記述が多い。具体的なことから抽象的なことまで、自分ができそうなことは多岐にわたって書かれている。一見、あまり一貫性がなく、個々人で大きく異なるこの「実践の可能性」であるが、よく読むとそこには通底するテーマが横たわっているようにも解釈できる。それは「地域の当事者として生きていくことへの覚悟」とでも呼ぶべき態度である。

その「当事者性の覚悟」を伴った「実践」は身のまわりの具体的なことから始めようとする。

基本的な挨拶から始めようと思う。学生に偏見を持っている方に対しても、学生と話したいと思っている方に対しても、登下校の際や、普段会ったときなどにも挨拶をする。基本的なことだが、意外と勇気を出して行動をしないとできないことである。(地域政策学科)

(地域学を) 自分のものとする方法として、自分が地域の一員であることを自覚し積極的に挨拶などをして、初めに身近にいる人と交流をもとうとするこの「自覚」こそが第一歩なのではないかと考えている。(地域環境学科)

おそらく地域(学)と向き合い、自分の生きざまを考えるという真摯な思考のプロセスを経ずに挨拶の励行を唱えてもあまり説得力はないだろう。それどころか、単なる「お題目」に終わってしまうおそれがあるようなトピックだ。しかし、これらの記述が強い説得力を持つのは、地域学の意義と格闘し、これまでの自分自身を内省するプロセスを経た上で、これらが自分の言葉として発せられていることだろう。確かに挨拶そのものは「地域活性化」に直結するような行為ではないかもしれない。しかし、自分のことを棚上げにした学問の無意味さをこの学生たちは深く理解したのではないだろうか。

また、ここからやや抽象度を上げて、他者と出会うことを挙げている記述も目立つ。

私を取り巻く「地域」に目を向け、人と人とのつながりを意識していくということから始めていければと思う。(地域政策学科)

いろんな人と出会い、いろんな本を読み、いろいろな刺激を受けることで、興味関心を形づけていくことが一番ではないだろうか。(地域政策学科)

それは多様な他者と出会うことだという結論に至った。他者と出会うことは多様な世界や生き方を知るだけでなく、“つながり”を生んでくれる。主観や客観にみた自分自身をきちんと自分自身で引き受け、それを他者と共有していくというプロセスは、自分が生きていく上で自分の地盤を固めていくことでもある。(地域政策学科)

自分の知らない場所、アウェイに自分を放り込むこと、他者と出会うことは私が今できる最低限の実践のひとつなのではないだろうか。……私自身の小さな実践を続けていくことが私自身にとっては非常に重要なことでもある。……それが私が受け止めた地域学を深めるための営みの方法である。(地域政策学科)

おそらくこれらのような覚悟は、必ずしも自分が「知らない」人や地域に出会うということだけではなく、これまで知ったつもりでいたが実は知らなかったものと出会いなおすことにもつながっていきそうだ。たとえば、次のような記述も興味深い。

自分がいかに鳥取のことを何も知らないかを思い知らされた。鳥取には何もない、と言われることが度々あるが、鳥取にも素晴らしい地域はいくつも存在している。……また私の地元においても知らない場所はたくさんある。……もっと自分の中の地域の範囲を広げることも、私が考える地域学においては重要だと思われる。(地域政策学科)

長い間住んでいた鳥取という地域をしてみると、もの足りなく感じる部分もある。しかし、そんな地域でもすごいと思うところが多くあるということに気が付いた。……まず、関心をもちとことん突き詰めていきたい。(地域環境学科)

大学生になり鳥取に来た時、何もなくて退屈なところで嫌で嫌で仕方なかった。……どの地域でも楽しみ方がどれだけでもあり、それを見つけることの大切さを地域学総説を通して実感することが出来てとても良かったと思う。(地域環境学科)

これらの記述は、「わたしが知っていること」を前提に語るのではなく、「わたしは何を知らないで今まで生きてきたのか／何を知ったつもりになっていたのか」という、自分が知らなかったことに気づくということに足場を置いている。つまり「わたしは何も知らない」という自覚が出発点である。だからまずは「知る」ことによって自分の地域像や世界像を拡大していこうという意思がここから伺えるように思う。

もちろん、より具体的な行動への意思もたくさん記述されている。なんといっても多いのは「ボランティア」活動への参加である。さらに踏み込んでどのようなボランティア活動をするのか、というところまで書かれてあるものは意外に少なかった。ただ、「ボランティア活動」という「身近なものから始める」という意欲が総じて多かった。また、次のような意欲もみられた。

私はボランティアそのものというよりも、そのなかでの人との出会いを大切にしたいと考えている。全ての出会いが良いものである保証はないが、様々な出会いの在り方を経験することが、実際の地域を知ることになるのではないだろうか。(地域政策学科)

これも上述の「他者との出会い」への願望につながるものである。

また「ボランティア」という言葉で表現されていなくても、次のような意欲が多くみられる。

「地域の行事やイベントへの参加」「サークル活動への参加」「町を歩く」「地元のことを知る」
「自分の故郷に仲間と一緒に連れて行き、そこの良さに共感してもらう」「自分の生まれ育った町の地域性を味わい、湖山に持ち帰る」「地域清掃に参加する」

もちろん、教員や保育士など、自分が将来就きたい職業が明確な学生の中には、それに向けた準備をしていくことを書いた学生もいる。ただ、そのように具体的な職業と地域学的実践を結びつけた記述は意外に少ない。

また、大学生という当事者性に着目した記述もいくつかみられた。

ここ（鳥取大学）で私がしなければならないことがある。多様な地域から集まっているこの場所だからこそ、多くの人とふれあい、多様な視点を養い、価値観を豊富にすること。地域環境学科の1人として現場から学び、科学の一面性・部分性を認識した上で（対象化した上で）、実際に臨んでいくこと。また卒業論文を通じて、不確実性を取り込んだ科学研究の倫理を発展させ、地域社会（人間社会）をも取り込むための「順応的管理」を身につけること。（地域環境学科）

3～4年にかけての卒業論文を利用したいと思う。……2年生から3年生にかけての地域環境調査実習で「地域」を数値化し診断することを経験したが、その数値と地域とリンクさせ診断、治療方法を考えることが想像以上に奥が深く、いろいろなことが絡み合っていて非常に難しかった。卒業論文でも再び同じようなことをするわけだが、自分の中の「地域学」をまとめるために避けては通れないと思う。（地域環境学科）

「地域学の実践」というと、大多数の者が学外での活動を想像するかもしれないが、「学生という当事者」を生きている立場から、大学生活における実践に着目しているのはとても興味深い。学生にとっては卒業研究こそが大切な実践である、ということをおそらく多くの学生はあまり意識していないのではないだろうか。上の卒業論文の重要性への気付きは、学生にとっての大切な実践へとひらかれていくように思う。

このような「自分にできること」の多様なイメージがレポートに記述された。そしてその先に「地域（学）を自分の言葉で語れるようになること」や「地域を他者と共有できるようになること」という目標を掲げていたのも、多くの学生に共通する特徴である。

いずれにせよ、これらの論点の大きな特徴は、必ずしも「大きな」実践はイメージされず、ほとんどの学生が自分の身の丈にあった、足元からの実践を語っていたことだ。それは必ずしも、ゲスト講師のように「大きな仕事」は自分にはできない、という無力感から発せられているわけではないようである。ある学生は次のように述べている。

「地域学」というものの懐の深さを知り、講義が進めば進むほどわからなくなっていくが、

ただひとつ、わかったことは、「誰にでも実践できる」ということである。(地域教育学科)

学べば学ぶほどわからなくなるというのは大変健康的なことだと筆者は考える。それは、「地域」というものが(もちろん「人間」というものも)自分が思っていたほどに／思いたかったほどに平板な存在ではないことに気づかされ、その多様性や複雑性を突きつけられるからだろう。そんな中で、モデルケースとして取り上げられる様々な活動が自分からかけ離れたものではなく、それらの活動の可能性や希望は自分の中にも存在するというを多くの学生たちは感じ取っているのではないだろうか。この学生の場合、「ただひとつわかったこと」は「誰にでも実践できる」地域学の可能性だと言い切っている。これは実践の規模や表層的に理解される「大きさ」ではない。大切なのは、様々な人びとの生きざまや覚悟、そしてそこから生まれてくる可能性や希望が実は自分のものでもあることを学生たちが自覚しているように思えることだ。上に列挙した多くの学生たちの身の丈にあった実践のイメージも、一見非常に些細なことのように見えるが、実はその根底にはあるのは、自らの「実践」に対する学生たちの確かな、あるいは静かな覚悟の表明のように思える。

おわりに

以上、2010年度の「地域学総説」最終レポートをもとに、この授業が学生に伝えたことや学生が受け止めたことについて考察してきた。多くの学生がたいへん興味深くそして根源的な論点を提起していることに驚かされた。これが率直な感想である。もちろん、それらの表現はまだ十分こなれたものにはなっておらず、この授業で得た視点や言葉もまだ自分のものにはなっていないかもしれない。しかし、学生たちが講義をもとに、自分の経験を絡めようとしながら、「自分なりの地域学」を模索してきたことはたいへん重要なことである。そして、彼／彼女たちの格闘は「では、あなたたちはどのように自分の言葉で地域学を語るのか」という教員たちへの問いかけのようにも読める。一見、たどたどしい表現のように見えながらも、実はたいへん根源的で、自分の経験から発している問題提起が多いことに気付かされる。

本稿の冒頭で挙げた「地域学のわかりづらさ」を、ここまで自分なりに言語化していく学生の2年半の訓練過程はたいへん興味深く、その重要性を改めて考えさせられた。また、授業の講師たちの経験や、それにもとづいて発せられる言葉に大きく戸惑いながらも、自分の経験と絡めながら、自分の身の丈で理解しようとする学生の姿勢からわれわれ教員も学ぶことが多い。

さらには、この最終レポートを読んでわかることは、学生たちは入学以降の2年半を越えて、大学入学以前の自分の経験にも言及しながら地域学を論じていることである。このようなことから、これらのレポートはこの授業内で完結したのではなく、大学内外でのこれまでの自分の経験や学びを広く振り返りながら書かれたものであることがわかる。このような意味では、この最終レポートはこの授業のまとめとしてのレポートという位置づけだけに留まるものではない。それは、大学の制度内における一科目としての地域学に留まらず、実は受講生それぞれの人生の中でこれまで継続し、そしてこれからも卒業研究、そしてその後の人生へと継続していく地域学をつなぐ、ひとつの中継地点での(現時点での)自分にとっての地域学の表明と考えた方がいいだろう。言うまでもないことであるが、レポートや論文の作成は単に単位を取得する手段ではなく、自分が生きた証を残すという行為でもある。

ちなみに、「地域学の継続」については次のような学生の記述がある。

この「地域学」をより深いものにしていくにはどうしたらよいのだろうか。私は「やめないこと」が大切だと考える。……地域学というものは触れば触れるほど深みを増す学問ではないかと考える。だからこそ卒業して大人になっても、いくつになっても学び続けることが出来る学問なのではないかと私は考える。地域学とはそれほど広い学問であるということであり、だからこそ先にも述べたように「やめないこと」が重要なのである。／この方達⁷はいくつになっても地域学という学問を「やめなかった」方達なのでは、と感じた。……地域学とは「継続する学問」なのである。……この学部で学んだことが必ず将来自分の糧になる時が来るように思う。それはどういった形で現れるかは分からないが、私が考える「地域学」を深めるために、地域に入ること、触れることを「やめない」、そしてそれを「継続したい」と思う。(地域政策学科)

ここにも強い、確かな覚悟が読み取れる。それは地域学を自分の一生の学問にしようという姿勢でもある。

このような収穫が多々あったように思えるものの、「地域学」なるものが本当にわたしたちにとって「役に立つ」ものになるのかどうか、まだまだ試行錯誤を続けていく必要がある。ややもすれば地域学とは「鳥取などの地方のお国自慢」とも取られかねない「理解」が世の中にはまだ存在するだろう。あるいは、そこまで貧しい理解ではなくても、地域学とは「(狭義の) 経済的な地域活性化を目指す学問である」という類の理解がまだ支配的かもしれない。まだこのような理解が支配的な社会において「この時代をわたしたちが生きていく作法としての地域学」の意義を多くの人びとにもっと明確にわかりやすく伝える言葉をわたしたちはまだ獲得していない。

これからも一人ひとりが地域を生きていく主体として、地域学を生きなければならないように思える。そして、多くの学生が自覚しているように、地域学は卒業したら終了するものではなく、卒業後にこそ生かされるものだと思う。そのような「継続する地域学」を創出することは、わたしたちの大きな課題だろう。このような点で、次の学生の記述は印象的だ。

いままでの地域学部で学んだ「地域学的視点」を使えない場所はないように思えてくる。……何かの企画・創造をできる仕事をしていきたいと考える私にとっては、これからどれだけ地域学を深く学んでいけるかが、社会人として自分らしく輝ける仕事をする未来へのカギとなっている気がしている。(地域文化学科)

地域学とは、アカデミズム内に留まる学問というよりは、まさに生きるためのアート(技法)と呼んでもいいようにすら思える。また、次の学生のコメントも、地域学は自分のアイデンティティに関わるような存在であることを感じさせる。

地域学総説という講義を通して、私の中で地域学というものがどういうものなのかが明確になってきたように感じる。自分の所属する学部を考え直すきっかけになり、地域学部に所属し

⁷ この授業のゲスト講師のこと。

ていることを誇りに思えるような講義であった。(地域文化学科)

繰り返しになるが、ここでとりあげた最終レポート群は、学生たちの変容の軌跡を示す貴重な資料であり、われわれの財産である。多くの学生は「地域学」についての理解がほとんどないままに大学に入学した。そして当初はそれは自分自身の暮らしや生き方とは直接関係がないような学問にすら思っていた。そのような学生たちが、他者の経験から学び、それを自分自身の経験と絡めていきながら地域の当事者としての自分の姿を発見し、変容していく過程が数々のレポートに描かれている。それは、自分自身の問いとして実感を伴ってとらえ切れなかった「地域」を自分の手に取り戻していく過程ともいえるのではないだろうか。あるいは、単に研究の対象だった「地域」を自分との関係性の中でとらえなおしはじめたともいえるだろう。つまりそれは地域を問う主体であった自分が、地域を生きる責任を問いかける存在に転化していくという、問いの転換がみられる⁸。そしてこの問いの転換は、単に新しい視点を獲得することに留まらず、地域に対する自己の向き合い方や、地域における自己の実践のあり方を変容させることにもつながっていくのではないだろうか。ここにそれぞれの主体にとっての新たな地域学の実践の萌芽がみられるように思う。

参考文献

- Gouldner, Alvin Ward, 1970, *The Coming Crisis of Western Sociology*, New York: Basic Books. (= 1975, 栗原彬・瀬田明子・杉山光信・山口節郎訳『社会学の再生を求めて 3』新曜社.)
- 今村仁司, 1992, 『現代思想の基礎理論』講談社
- 鳥越皓之, 2006, 「学問の実践と神の土地」新崎盛暉・比嘉政夫・家中茂編『地域の自立 シマの力 下』コモンズ, 276-294
- 柳原邦光, 2010, 「地域学総説の挑戦5」『地域学論集』第7巻 第2号

(2010年10月6日受付, 2010年10月15日受理)

⁸ アメリカの社会学者・A.W.グールドナーは、科学としての社会学のあり方を反省し、それまでの伝統的な社会学の態度を批判的に乗り越えるために「自己反省の社会学 reflexive sociology」を提唱した。彼は「知識knowledge」を「情報information」と「明識awareness」に二分し、社会学は「明識」としての知識を生産すべきだと説いた (Gouldner 1970=1975)。グールドナーによれば「情報」は「自然・社会・人間」という対象を支配するテクノロジーを発展させるための知識であるのに対し、「明識」は「人間自身の時とともに変化していく関心、希望、価値にかかわりのある知識」である。そして「明識」は「たんに世界を〈コントロール〉することを容易にするための知識ではなく、社会的世界における自分の〈位置〉についての人間の明識を高めるような知識」である。このような発想法にたてば、「研究主体と研究客体とは相互的に関係しあっているばかりでなく、相互的に構成されている」とみなされる。このようなグールドナーの議論を援用すれば、学生たちは地域をとらえる「明識」としての視点を得はじめたように思える。